

よさやもてる力を発揮して生活する生徒を目指した授業づくり
- 支援ツールを生かした指導及び支援の教師間共有と関係機関との連携を通して -

提案者 末廣 剛志 萩之内 靖

1 学部研究テーマ設定について（紀要pp. 91 - 92）

わたしたちは生徒自身が必要な支援を受けながら自立した生活を送ったり、よさやもてる力を様々な生活場面で発揮したりすることができるような授業づくりを目指している。そのためには、授業実践における指導及び支援を効果的かつ明確なものとし、教師間や家庭、関係機関とつないでいくことが重要となる。

そこで、より確実な連携のために、つなぐための道具として支援ツールを考え、支援ツールを活用した授業づくりの研究を深めていく。具体的には、学校や家庭、関係機関がそれぞれの立場で指導及び支援に当たるだけでなく、様々な生活場面で支援ツールを生かし、学習環境や教師の働き掛けなどの必要な事柄を共有・協働する取組を進めていく。

2 研究内容と方法（紀要pp. 93 - 94）

(1) 研究内容

< 研究内容 1 >

家庭、関係機関との連携において、自分のよさやもてる力を発揮するために必要な支援ツールの在り方を探る。

< 研究内容 2 >

各授業実践において、有効な指導及び支援を明らかにし、自分のよさやもてる力を発揮するために必要な支援ツール活用の在り方を探る。

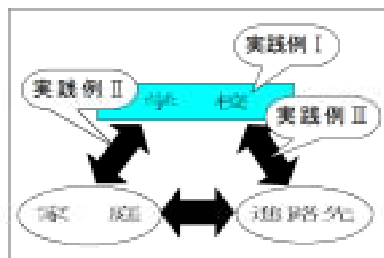
< 研究内容 3 >

現場実習先や進路先において、現在及び将来にわたり自分のよさやもてる力を発揮して生活するために必要な支援ツールを生かした連携の在り方を探る。

(2) 研究方法

授業実践については、学校での取組（実践例Ⅰ）、学校で身に付けた力を家庭につなげていく取組（実践例Ⅱ）、学校で身に付けた力を進路先につなげていく取組（実践例Ⅲ）という視点から、三つの授業実践を選定した。各授業実践では、有効な指導及び支援を明らかにし、支援ツール活用の在り方を探る。

関係機関との連携については、「現場実習」と「移行支援」に焦点化し、現在及び将来にわたり自分のよさやもてる力を発揮して生活するために必要な支援ツールを生かした関係機関との連携の在り方を明らかにする。



実践例の位置付け

3 実際（紀要pp. 95 - 118）

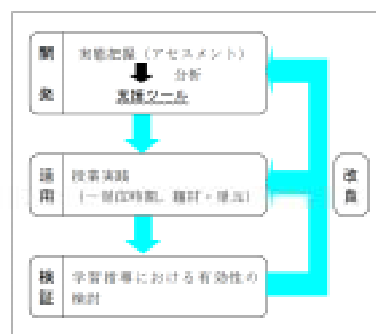
(1) 支援ツールの在り方について

支援ツールは、本人のよさやもてる力を発揮しやすくするものであり、本人のよさやもてる力とそれを発揮できていないという状況を埋めるものと言える。そこで、精度が高く活用しやすい支援ツール作成のために、「開発」「活用」「検証」「改良」という四つの段階を設定し、支援ツール作成のサイクルを構築した。

そこで、広く生活場面で共有することができる支援ツールを次のようなものと考えた。

生徒の実態や行動観察、心理・発達検査等のアセスメントを行い、生徒一人一人の目標設定を明確にし、課題解決に迫るためのより精度の高い支援ツール。

支援ツール作成のサイクルを生かし、様々な生活場面で共有しやすい支援ツール。



支援ツール作成のサイクル

(2) 各授業実践における支援ツール活用の在り方について

実践例 認知等の特性を生かした支援ツールの開発を中心とした取組(国語・数学)

「K - A B C心理・教育アセスメントバッテリー」を実施し、その検査結果や生徒個々の実態を基に数学の金銭に関する指導と文字の個別指導について、認知等の特性に基づいた精度の高い支援ツールを開発し、活用することを試みたり、指導プログラムや支援を工夫したりする取組を行った。

実践例 調理の自立を目指した家庭との支援ツールの共有(くらし)

家庭のニーズと生徒自身の技能面の獲得という二つの視点によるアセスメントから、生徒の調理活動における課題分析を行い支援ツールとして作成した。さらに支援ツールを家庭と共有しながら、その方法や家庭と連携した支援の在り方について検討した。

実践例 実習先や進路先へつなぐ支援ツールを活用した授業実践(作業学習：窯業班)

作業学習の中で高めたよさやもてる力を実習先や進路先でも発揮できるようにするとともに、卒業後のスムーズな移行を目指し、実習先や進路先へつなぐための支援ツールの作成と共有の方法を探る取組を行った。

(3) 支援ツールを生かした連携の在り方について

現場実習における関係機関との連携

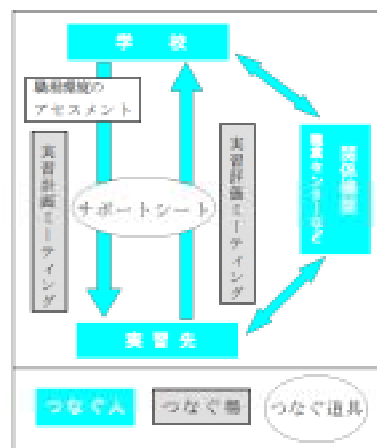
現場実習における協働 ～サポートシートと職場環境のアセスメント～

ア サポートシート

サポートシートは、現場実習先と学校の間を「つなぐ道具」である。必要な支援について実習先と共通理解を図り、初めての環境で生じる本人の不安感を取り除き、支援する側にとっては様々な作業場面において共通のかかわりをするために活用するものとして有効であった。

イ 職場環境のアセスメント

職場環境のアセスメントは、本人の課題や作業能力と実際の作業を照らし合わせ、本人のよさやもてる力を発揮できる作業内容を決定する際に欠かせないものである。「事前学習で作業工程の写真を提示できる。」「環境面について確認・調整ができる。」などの成果が得られ、本人が安心感をもち、実習に臨むために有効であった。



現場実習における新たな視点

移行支援における関係機関との連携について

移行支援における協働 ～支援会議と卒業後の支援を中心に～

支援会議は、生徒自身が卒業後にかかわる関係機関を知り、学校と卒業後の支援者が必要な情報を共有することで、学校生活から社会生活へスムーズに移行できるようにすることを目的としている。卒業後の本人のニーズに応えることはもちろん、本人を取り巻く保護者、卒業時の進路先や現利用先、学校と、それぞれの立場でどのような支援が有効かということについて情報交換する場として有効なものであると考える。

4 まとめと今後の課題(紀要pp. 119 - 120)

支援ツールの在り方について

アセスメント結果を教師間で共有し、支援ツール作成のサイクルに沿って支援ツールを開発することの有効性が明らかになった。

支援ツール活用の在り方について

学校・家庭で支援ツール及び活用の手立てを共有することの有効性が明らかになった。

支援ツールを生かした連携の在り方について

実習先でサポートシートを活用したり、支援会議を実施したりすることで、学校生活から社会生活へのスムーズな移行につながる連携の在り方が明らかになった。

授業場面や生活場面における有効な働き掛けや効果的なフェイディングについて検討を進める必要がある。

支援ツールを活用した家庭や実習先、進路先との連携を更に進めつつ、その成果を授業場面に生かしたり、検証し支援ツールの精度を高めたりする必要がある。